

ビジュアル系
子ども・家族の
理解と支援

七 面接の流れ②



家族援助あれこれ（２）

児童精神科を訪れる家族は、当事者ならではの「問題理解」への賛同を強く期待している。

それを受け入れるのが信頼関係確立の最短距離だろうが、その理解から問題は煮詰まったわけで、おいそれとはうなずけない。

今回は、「家族のそうした期待を外し別の仮説を出す」ことを考えてみる。

いつものように、団士郎氏の許諾をいただき、木陰の物語と家族の練習問題からマンガを転載しています。

(2) 想定外→揺れ・痛み→枠の外へ

当事者の“期待通り”に話が進むと、とりあえず「安心・安定」をもたらすだろう。それに対し、“変化”は「いまと違う」ところにあるから、ある種の痛みを伴うことになる



しんどい不適應感には杖を、痛みを伴う変化には鎮痛剤か局所麻酔を！
って話やな





変化に伴う痛みの緩和には、
①これまでの解決策がうまく
いってなくても、その努力をき
ちんとねぎらうこと
②クライアントの困りごとを最
優先すること、が必要だ



そらそや、ワシらの意
図とは違っても、先
方さんが困ってはる
ことに手を差し伸べ
るのがスジや



さらに、③いまそこにある「強
み」について語ること。リスクや
問題点は、当事者としてじゅ
うぶん承知しているけど、その
真逆は思いもよらないはずだ



ええこと言うがな！弱点とか
問題点と信じているものを
視点を変えて強み・長所と
して語れたら、プラスマイナス
2倍の効果があるもんな

そうしてある程度痛み
を緩和できたら、前回
言った「最低・最悪」
の根拠が詰まった箱
を開けさせてもらう



根拠となってる
のは、だいたい
ざっくり否定した
エピソードやろ？



脇見運転の
ススメかい！

そのとおり。だから、話の全
体や核心じゃなく周辺・
脇を見る。で、肯定できる
部分とか例外的にマシな
部分を見つけ出す

エピソード間の時系列的な比較から、
些細な変化とかちよつとした違い、微妙
な改善など「ささやかなマシ」を取り上げ、
どんな工夫をしたのかと尋ねる



そこから「もしかしたら
最悪・最低じゃない
かも・・・」「だったら、
このままでいい？」
みたいな“揺れ”を目
指すわけや





そういうこと。変化には
痛みの緩和が欠かせ
ないように、変化の持
続には「心地よさ」が必
要なんだ

ダイエットと同じやな。
体重減少を目で確認
するっちゅう快樂刺激
がないと続かへん



極めつけは、当事者自身が
“最悪・最低”の根拠に合
致しないエピソードを見つけ
ることだ



それこそが最強の快感や。
どうやら、エピソードのチョイ
ス、ながめるポジション、そ
のあたりがキモみたいやな



そうか？微妙
にちゃうやろ！

置き換え、けっこう力業
やな。けど、話長うなり
そうやし、もう終わろ

そして、いよいよ置き換
えだ。概して、当事者が
確信している説だと解
決が難しい。で、「○○
が問題だと考えておられ
たのですか？ 実のところ、
わたしは△△が問題と
考えてます」と。こっちの
説が想定外でなんとかな
りそうで、かつ実行可
能な具体策とセットだと、
この置き換えはうまくいく。
内科や外科では、ふつ
うにやってることだろ？